

# 奥入（二次）・伊行釈所引の古今歌

—— 俊成源氏学へのアプローチ ——

## 八木意知男

### ○ は じ め に

藤原俊成に、俊成校訂の源氏物語が存在したことは紫明抄等に徴し明らかである。又、歌学と相俟って、源氏物語に関する研究に於いても碩学であつたらしい。しかしながら、その内容は断片的に知り得るのみである。ところが、その内容を無視して中世に於ける源氏物語を語るのは極めて危険であると言わねばならない。つまり、中古的源氏観と中世的源氏観との接点に位置することもさることながら、歌学の史的流れと源氏物語研究とは切り離し得ないと考えられるからである。

ところで、私は上述の意味をも含めて紫明抄所引の古今歌を考えた（皇学館論叢第二巻第五号）のであるが、古今集の流布の問題に關して一部に疑念もあらうかと思われる。そこで、その疑念を晴らす為をも含めて、奥入（二次）・伊行釈に所引された古今歌を考えてみることにする。

テキストは、奥入・伊行釈ともに源氏物語大成研究資料編に翻刻されたものを用いる。又、紫明抄・河海抄は角川書店版を使用する。

### 一 奥入（二次）

奥入は藤原定家の作にかゝり、しかも晩年に成つたとされている。ということは、奥入成立当時すでに彼の手によつて校訂された古今集が存在したのであつて留意しなければならない。

奥入（二次）以下、単に奥と呼ぶは二次本の讀みである。には、一〇七首の古今歌が二二七箇所に引かれている。但し、「君ならてたれにか見せむ梅花」、「きみかうへしひとむらすゝき」の如く、一首を完全には引いていない場合もある。しかしながら、今は引き方を問題にはしない。

さて、一〇七首を検討するわけであるが、その際、一首が二箇所に以上に亘つて引かれていて箇々に本文に差異が認められるものがあ

表1

	本文 有数	一致率%
私稿本	28	56.3
本阿弥切	38	50.0
志香須賀本	81	45.7
基俊本	109	49.5
筋切本	40	60.0
元永本	111	48.6
唐紙卷子本	17	29.4
関戸本	28	60.7
雅俗山庄本	108	61.1
静嘉堂本	27	66.7
六条家本	109	45.9
寛親本	84	52.4
永治本	111	55.9
前田本	110	50.0
天理本	111	56.8
後鳥羽院本	84	50.0
伝寂蓮筆本	23	78.3
右衛門切本	16	68.8
雅経本	110	54.5
永曆本	111	58.6
昭和切本	28	71.4
建久本	109	66.1
寂恵本	111	72.8
伊達本	111	72.8
高野切本	35	60.0
中川切本	39	56.4
嘉禄本	111	70.3
貞応元年本	111	70.3
貞応二年本	111	71.2

る。これらは、各々を簡別の一首として扱うことにする。まず目安をつけるため、検討した結果を表示(表1)する。

本表に依れば、伝寂蓮筆本を頂点として、所謂俊成本・定家本がこれに続いて一致率が高いことになる。ところが、一致率が最も高いからといって、たゞちに、奥入依拠古今集は伝寂蓮筆本若しくは同系統のものであると断定することは、甚だ危険であるといわねはなるまい。即ち、伝寂蓮筆本が上巻だけであること、又、紫明抄の場合に比して一致率が多少低いからである。そこで例を掲げて検討することにする。

いつまでかのへに心イのあくかれむ花イしちらすはロちよもへぬへし  
(梅枝)

この歌古今集九六であるが、傍線部イを筋切本では「あくかれて」につくり、他は全て「あくかれむ(ん)」につくる。又、傍線部ロ

を私稿本・永治本・前田本・天理本では「としも」、基俊本は「ものをもはし」、六条家本では「としも」につくり、元永本・雅俗山庄本・静嘉堂本・伝寂蓮筆本・雅経本・永曆本・昭和切・建久本・寂恵本・伊達本・嘉禄本・貞応元年本・貞応二年本では「ちよも」につくる。従って、清輔系諸本・私稿本・基俊本・筋切本が一致しないことになる。

白雲にはねうちかはしとふかりのかすさへ見ゆる秋の夜の月  
(横笛)

この歌古今集一九一であるが、傍線部基俊本・筋切本・元永本・関戸本・永治本・前田本・天理本・雅経本では「かけ」につくり、六条家本は「かけ」、永曆本「かす」、建久本では「かす」、寂恵本が「かす」、静嘉堂本・伝寂蓮筆本・昭和切・伊達本・嘉禄本・貞応元年本・貞応二年本では「かす」につくる。従って基俊本・筋

切本・元永本・関戸本・永治本・前田本・天理本・雅経本・六条家本・建久本が、奥入所引の古今歌本文と一致しないことになる。

如上の例が存する以上、私稿本・基俊本・筋切本・元永本・関戸本・永治本・前田本・天理本・六条家本・雅経本・建久本を奥入の依拠した古今集とは認め難い。

身をすてゝいにやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり

（葵）

この歌古今集九七七。傍線部本阿弥切（本朝能書伝）は「いりやしにけん」、前田本は「いまやしにけむ」、志香須賀本・基俊本・雅俗山庄本・六条家本・永治本・天理本・雅経本・永曆本・建久本では「いきやしにけむ」、唐紙卷子本（某家目録）・寂恵本・伊達本・嘉禄本・貞応元年本・貞応二年本では「ゆきやしにけむ」に、寛親本が「イキヤシニケム」、後鳥羽院本が「いにやしにけむ」に、元永本・高野切では「いにやしにけむ」につくる。従って、奥入と一致本文をとるのは、後鳥羽院本文・元永本・高野切である。伝寂蓮筆本は本文がない。

おほぬさとなにこそたてれなかれてもつゐによるせはありといふ物を（あつまや）

この歌古今集七〇七である。傍線部イを永曆本では「たてね」につくり、他諸本は「たてれ」につくる。傍線部口を雅俗山庄本は「なかれては」につくり、他諸本は「なかれても」につくる。次に傍線部ハを志香須賀本・元永本・関戸本・永治本・前田本・天理本・後鳥羽院本・雅経本・民部切・永曆本・建久本・伊達本・中山切・嘉禄本、貞応元年本・貞応二年本では「ありてふものを」、本阿弥

切・基俊本・雅俗山庄本では「ありといふものを」に、六条家本では「ありといふものを」に、寛親本は「アルテフモノヲ」に、それぞれつくる。従って、本阿弥切・基俊本・六条家本本文が奥入と一致することになる。但し、伝寂蓮筆本は本文が存しない。

以上、古今集七〇七及び九七七により、前述のものと共に俊成校訂本・嘉禄本・貞応元年本・貞応二年本の定家校訂本も依拠古今集ではないことになる。では、何故伝寂蓮筆本は上巻しか存しないにしろ、八〇%以上の一致をみないのか。それは奥入自身の問題といえる。即ち、次の如きが存するからである。

いのちたに心かなふ物ならはなにかは人をうらみしめせむ

（若紫）

この歌、上句は古今集三八七であり、下句は伊勢集一八五二三と思しい。この場合、源氏本文

よしやいのちだに（大成・一・一七一・若紫）

に対して注せられたものであって、下句が誤りと言える。しかも古今集諸本の当該部分に差異は認められない。

のりなくちるそめてたきさくら花なにかうき世にひさしかるへき（若菜）

この歌、上句は古今集七一、下句は伊勢物語

散ればこそ最と桜はめてたけれ浮世に何か久しかるへき（一六二）

の下句と思しい。この場合、源氏物語本文

なにかうき世にひさしかるへきとうちすし（大成・二・一一八七・わかな下）

に対して注せられたものである。源氏釈・奥入一次では当該箇所に対する注はなく、紫明抄（一二四・上）は奥入と同本文、河海抄では

残りなくちるそめてたぎ桜花ありて世中はてのうければ古今  
これはこそいと、桜はめてたけれなにかうき世に久しかるへき  
（四八九・下）

となる。従って、河海抄では正しい形の古今集と伊勢物語の歌とを二首ともに注していることになる。いずれの歌をもって注するかはさておき、奥入に注された古今集七十一番の歌の句は諸本一致し伝寂蓮筆本とも一致する。

以上、伝寂蓮筆本上巻中に存する歌の場合を二例掲げた。その他にも、

みなといりのあしわけをふねざはりおほみおなし人にやこひむ  
と思し（若紫）

の如く、万葉集と古今集の接続による誤りも存する。畢竟、奥入の注自身、はなはだ不安定ということになる。

これまでの作業を通し、奥入の注はその本文の安定を欠いているが、にもかゝらず七八%強の一致率を示す伝寂蓮筆本は、高く評価しなければならぬことになる。つまり、所引古今歌という一つの枠をもってすれば、俊成源氏学の射程から少しはされることなのである。

## 二 伊 行 釈

源氏物語釈は、奥入に先立つこと大凡六〇年、世尊寺伊行の手に

奥入（二次）・伊行釈所引の古今歌（八木）

なった。そこで、世尊寺家々本の古今集はいかなる形態に属するものであるのか、という問題と当然関わることになる。

さて、伊行釈には一〇七首の古今歌が、一三二箇所に注記として引かれている。論をすゝめるにあたり、目安を得るため、まず一四首を検討した結果を表Ⅱとして掲げることにする。本来、一〇七首のものが一一四首になるのは、

みなといりのたな、しを船こきかへりおなし人をや恋しと思し  
（若紫）

と、一箇所にあり、他の箇所では

いりえこくたな、しをふねこきかへりおなし人をや恋わたるへ  
き（真木柱）

の如く、本文に差異が存する歌があるからである。なお又、

おほあらしのもりのした草おいぬればこまもすさますかる人も  
なし（紅葉賀）

と前田家本にあるところ、傍線部書陵部蔵本では「すさめす」とあり、古今集諸本が一致して書陵部蔵本と合致する場合もある。この場合、書陵部蔵本の本文をもって一致したことになる。

表Ⅱによれば、伝寂蓮筆本・静嘉堂本の一致率が高いとは言うものの、何れをも依拠古今集とは認めがたいことになる。それは、箇々の歌により、対立することに徴し明白である。即ち、

さゝのくまひのくまかわにこまとめてしはしみつかえかけをた  
にみん（葵）

この歌古今集一〇八〇であり、書陵部蔵本にも差異はない。傍線部

表Ⅱ

	本文数 本保	一致率%
私稿本	25	44.0
本阿弥切	41	41.5
志香須賀本	88	42.0
基俊本	114	44.7
筋切本	37	32.4
元永本	114	41.7
唐紙卷子本	14	43.9
関戸本	27	51.9
雅俗山庄本	109	48.6
静嘉堂本	26	53.8
六条家本	111	43.3
寛親本	86	39.5
永治本	114	43.9
前田本	114	44.7
天理本	114	41.2
後鳥羽院本	84	46.4
伝叔蓮筆本	22	59.1
右衛門切	14	50.0
雅経本	112	42.0
永曆本	114	50.0
昭和切	27	55.6
建久本	111	51.4
寂恵本	113	51.3
伊達本	114	50.0
高野切	38	39.5
中山切	49	46.9

志香須賀本・元永本・六条家本・寛親本・永治本・前田本・天理本・後鳥羽院本・雅経本では「よそに」につくり、永曆本「かけを」、基俊本・関戸本・雅俗山庄本・建久本・寂恵本・伊達本・高野切では「かけを」にそれ／＼つくる。従って、釈に一致するのは、基俊本・関戸本・雅俗山庄本・建久本・寂恵本・伊達本・高野切それに永曆本文となる。

みよしのゝやまのあなたにやとまかな世のうき時のかくれかに  
せん（蓬生）

この歌古今集九五〇であるが、傍線部イを基俊本・永治本・前田本・天理本・高野切では「かなた」に、雅経本は「あなた」に、志香須賀本・元永本・雅俗山庄本・六条家本・寛親本・後鳥羽院本・永曆本・建久本・寂恵本・伊達本では「あなた」につくる。又、傍線部ロを志香須賀本・基俊本・元永本・六条家本・寛親本・永治

本・前田本・天理本・後鳥羽院本・高野切では「いゑ（へ）」に、雅経本「いへ」、雅俗山庄本・永曆本・建久本・寂恵本・伊達本では「やと」につくる。従って、釈と一致本文は雅俗山庄本・雅経本校・永曆本・建久本・寂恵本・伊達本となる。この二例は、清輔本が否定され、俊成本あるいは雅俗山庄本が一致する例である。次に俊成本あるいは雅俗山庄本が否定され、清輔本が一致する例を掲げてみる。

おいぬれはさらぬわかれのありといへはいよ／＼みま／＼ほしき  
君かな（夕顔）

この歌古今集九〇〇である。傍線部曼殊院本は「もありてへは」、元永本・雅俗山庄本・永曆本・建久本・寂恵本・伊達本では「もあり」といへは」、六条家本・寛親本「のありといへは」、後鳥羽院本の「もありといへは」、志香須賀本・基俊本・永治本・右衛門切では

「のありといへは」、前田本・天理本・雅経本・今城切では「のありてへは」に各々つくる。従って、志香須賀本・基俊本・六条家本文・寛親本本文・右衛門切・後鳥羽院本校が、和と一致することになる。

君かうゑし<sup>イ</sup>ひととす、きむし<sup>ウ</sup>ねのしけきのへともなりにける  
かな(横笛)

この歌古今集八五三であるが、第三句「むしねの」は「むしのねの」であって諸本同文なので問題としない。傍親部イを本阿弥切・基俊本・元永本・雅裕山庄本・永麿本・建久本・寂恵本・伊達本では「ひとむら」につくり、志香須賀本・六条家本・永治本・前田本・天理本・後鳥羽院本・雅経本が「ひともと」につくる。又、傍親部ロを六条家本のみ「秋」とする。従って、和に一致するのは志香須賀本・永治本・前田本・天理本・後鳥羽院本・雅経本及び六条家本校である。

これらは、主として俊成本対清輔本の中で考えたのであるが、一本ないしは二本のみと一致する場合が一二例数えられる。例えば、世中はいつくかさしてわかならんゆきとまるをそやと、ざたむる(夕顔)

この歌九八七であるが、建久本と一致本文である。

ひさかたのなかにおひたるやとなればひかりをのみそたのむへ  
らなる(松風)

この歌古今集九六八であるが、後鳥羽院本に「ざと<sup>ヤ</sup>とあり一致する。

ひとしれぬおもひやなそとあしかきのまちかけれともあふよし

奥入(二次)・伊行和所引の古今歌(八木)

もなし(常夏)

この歌は古今集五〇六であり本阿弥切のみが一致する。

ちはやふる神のいかきにはふくすもあきにはあえずもみちしに  
けり(若菜下)

この歌古今集二六二であって、寸松庵色紙・雅経本に一致する。の如きがそれである。

如上の現象は、和所引の古今歌自体が否定されるべきものではなく、むしろ、『成立論』に載られざる古今集の可能性が強いと言えるのではなからうか。即ち、いずれかの系統、あるいはいずれか一本には偏らないにしろ、箇々の本文はそれ／＼認められるものであるからである。

いずれにせよ、和所引の古今歌が俊成本から離れていることは事実である。

### ○ おわりに

以上、奥入と和に所引の古今歌を考えた。その結果、奥入では多少不安定であるとはいふもの、伝寂蓮筆本との一致が最も高く、伊行和では古今集伝本のいずれか一本に依るといふことにはならないけれども、個々の本文自体はそれ／＼認められる、という事実を知り得た。このことは、二注和書はともに、俊成本古今集には依っていないのであって、黎明抄の場合と比較して俊成の影響の少ないことを意味する。つまり、どの歌をもつて注するかは踏襲であつても、どの本文をもつて注するかは踏襲ではないからである。

従って、所引の古今歌を基準として俊成源氏学の射程の範囲を考

奥入（二次）・伊行釈所引の古今歌（八木）

えるならば、紫明抄は射程内に含まれており（前掲拙論）、奥入・  
釈は射程外に位置することになる。しかし、だからといって、俊成  
源氏学を考える時に奥入あるいは伊行釈が無意味であるというので  
は勿論ない。紫明抄ほどに俊成源氏学の影響を受けてはいないとい

うのであって、要はあつかい方である。

注 拙論「紫明抄所引の後撰歌」中古文学第七号参照

（四六・七・三）

岡